

方言特有の「イキナリ」「ナゲル」「オチル」の分布状況

櫛引 祐希子

1 はじめに

下にあげたイキナリ、ナゲル、オチルを使った文に対して、違和感をおぼえる人とそうでない人がいるだろう。ただし、違和感を覚えるとしたら、AではなくBの方ではないだろうか。

- (1) A: 車がイキナリ飛び出してきた。
B: イキナリ暑いなあ。
- (2) A: ピッチャーがボールをナゲル。
B: 紙くずを足元のゴミ箱にナゲル。
- (3) A: 花瓶が柵からオチル。
B: 汽車からオチル。

種を明かせば、(1)(2)(3)のAは共通語の意味(全国どこでも通じる意味)のイキナリ、ナゲル、オチルを使った文で、Bは方言特有の意味(特定の地域で通じる意味)のイキナリ、ナゲル、オチルを使った文である。それゆえ、方言の意味を知らなければ、別の言い方をすれば共通語の意味しか知らなければ、Bのイキナリ、ナゲル、オチルに対して違和感を持つのはごく自然なことである。

だが、宮城県の仙台市方言話者の多くはBのイキナリを違和感なく使うし、東北方言話者のほとんどがBのナゲルを日常生活で使っている。また、Bのオチルを使う東北方言の話者もいる。

しかし、一概に東北といっても内実は様々な事情を抱えた地域の集まりである。東北の山間部と沿岸部では気候や風土が違うように、地域によって使用される方言には違いがある。今回調査した南三陸地域は宮城県においても岩手県においても中心部から離れた地域であり、他の地域にはない文化や習慣があることが知られているが、方言に注目するとどのような性格が見えてくるのだろうか。本稿では、共通語と同一の形態を有する方言特有のイキナリ、ナゲル、オチルの地理的な分布を通して南三陸という地域について考える。

2 調査概要

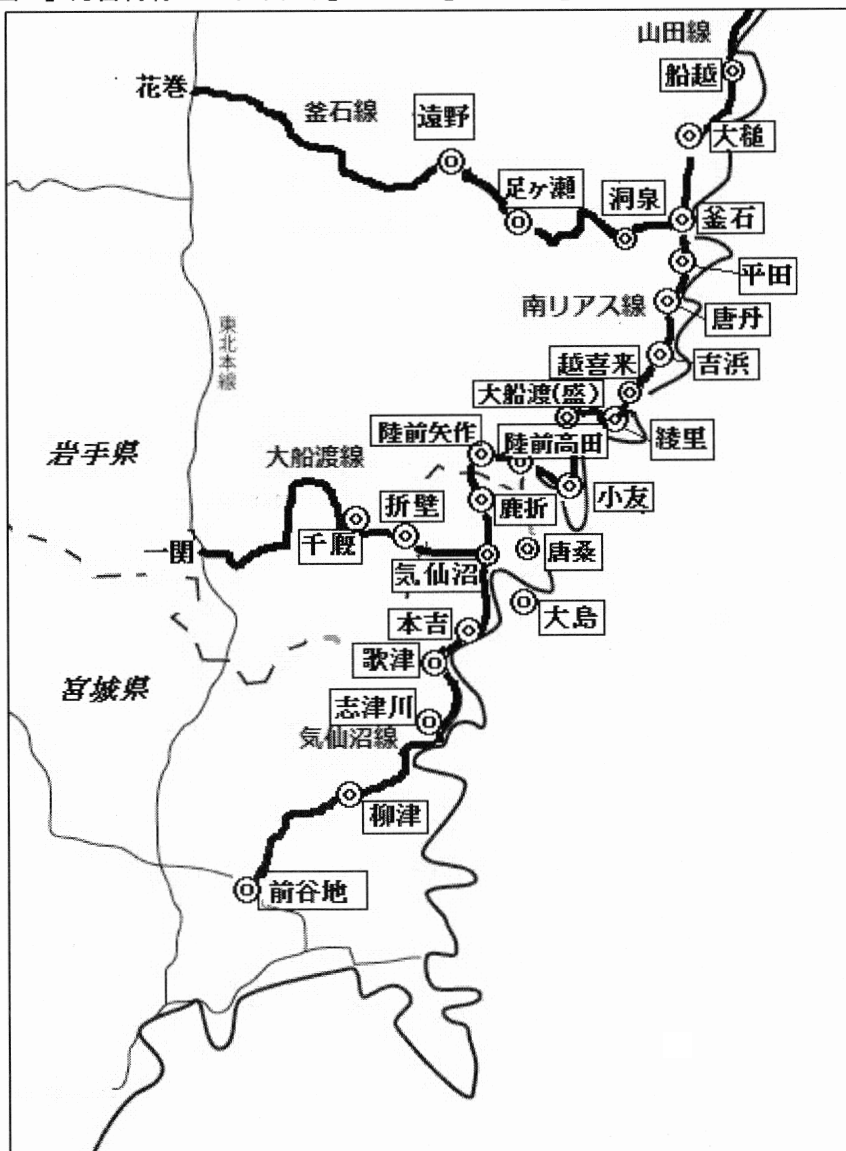
筆者は2007年に行われた東北大学大学院文学研究科国語学研究室による南三陸方言調査に参加し、方言特有の意味を持つイキナリ、ナゲル、オチルの使用状況について調べた。質問文の一部を次のページに示す。

◀調査における質問文（一部）▶

- 「非常に暑いなあ」ということを「イキナリ暑いなあ」と言いますか。
- 握っていた手をゆるめ、紙くずを足元のゴミ箱に捨てることを「紙くずをナゲル」と言いますか。
- ところで、（調査地域名）には、（鉄道名）がありますよね。（鉄道名）のような汽車が駅に到着して、お客が下車することを、（調査地域名）では、汽車からどうすると言いますか？

調査は、下の【図1】に示した26地点の高年層に方言特有のイキナリ、ナゲル、オチルを使用するかどうか面接して尋ねるかたちで行った。なお、分析の参考にするため、若年層13名にも同じ質問で使用の有無を確認した。

【図1】方言特有の「イキナリ」「ナゲル」「オチル」の調査地点



3 程度副詞的なイキナリの分布

宮城県仙台市を中心とした地域では、共通語では情態副詞として事態成立の瞬間性と意外性を表すイキナリ（例、「イキナリ雨が降ってきた」）を、「イキナリおいしい」「イキナリ暑い」のように「非常に」という意味で程度副詞的に使うことが知られている。なお、この時、イキナリは変化や状態の程度性と意外性を表す（佐藤（2000, 2003））。

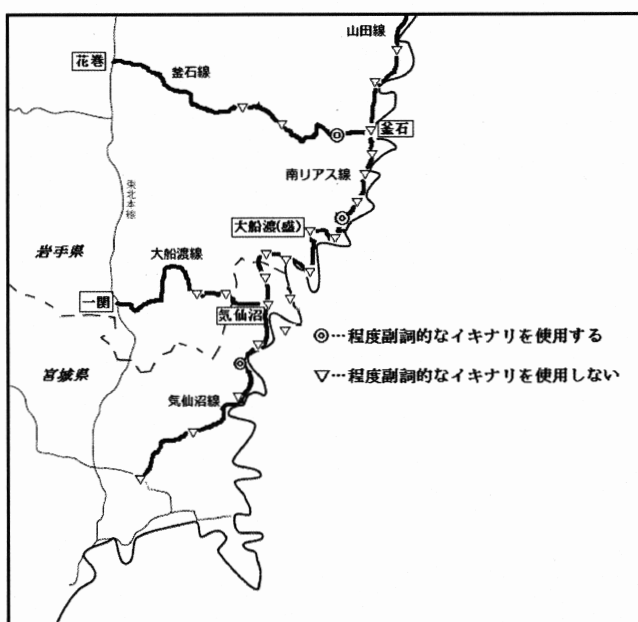
佐藤（2003）では、程度副詞的なイキナリが情態副詞である共通語のイキナリから派生したことを指摘した。すなわち、イキナリの被修飾語が瞬間的な動作や変化を問題にする動詞から程度を問題にできる動詞にまで拡大したことで、イキナリが状態の程度性を意味に取り込み、動詞の他に形容詞や形容動詞も修飾するようになったと考えられるのである。これをまとめると次のようになる。

【図2】程度副詞的なイキナリの派生

	意味	被修飾語	変化 ↓
共通語のイキナリ	瞬間性と意外性を表す	瞬時に行われる動作・変化を表す動詞	
方言特有のイキナリ	程度性と意外性を表す	動作・変化・状態の程度を問題にできる動詞 形容詞・形容動詞	

ところで、程度副詞的なイキナリが情態副詞である共通語のイキナリから派生したとすれば、情態副詞のイキナリを使用する地域には程度副詞的なイキナリが生じる素地が整っているということになる。だが、実際に程度副詞的なイキナリの使用が報告されているのは宮城県の仙台市を中心とした地域であり、全国的な使用は認められない。つまり、程度副詞的なイキナリの使用は、仙台市を中心とした地域特有の現象ということになる。したがって、もし仙台市の社会的威光が強く、その方言に影響力があるならば、程度副詞的なイキナリは仙台市から遠く離れた南三陸地域や岩手県の内陸にも伝播しているはずである。しかし、2007年度の調査では【図3】のような結果となった。

【図3】南三陸地域における程度副詞的なイキナリの分布



図にあるように南三陸地域における程度副詞的なイキナリの使用は、3地点(岩手県洞泉、岩手県越喜来、宮城県歌津)だけである。なお、歌津の話者は19から22歳まで仙台に在住した経歴がある。岩手県の洞泉と越喜来で使用の回答があった理由はよくわからない。

さて、この結果だけを見ると、南三陸地域では程度副詞的なイキナリを使用しないという結論を導きたくなるが、そう結論付けるのは少々乱暴である。なぜなら、一概に程度副詞的なイキナリといっ

でも、今回の調査のように形容詞を修飾する程度副詞的なイキナリもあれば、動詞を修飾する程度副詞的なイキナリもあるからである（例、「イキナリ揺れる」「イキナリ踏む」）。先の【図2】に示したように、イキナリが形容詞を修飾するようになるのは程度副詞化の最終段階である。動詞を修飾する程度副詞的なイキナリは、昭和13年に刊行された土井八枝による『仙台の方言』にも掲載されており、高年層に広く浸透していることが考えられる。したがって、もし今回の調査で動詞を修飾するタイプの程度副詞的なイキナリの使用を尋ねたならば、【図3】の結果以上に使用する地域が増えた可能性があることは否めない。

そこで、少し視点を変えて南三陸地域の若年層の使用状況に注目してみよう。仙台市では形容詞を修飾する程度副詞的なイキナリの使用は高年層よりも若年層に多いのだが（佐藤（2000, 2003））、南三陸地域でも同様の傾向が見られるのだろうか。今回の調査では調査地域すべてで若年層の使用状況を調べたわけではないが、調査した範囲では次のような結果になった。

【図4】南三陸地域の若年層における程度副詞的なイキナリの使用状況（○；使用 ×；不使用）

【岩手県】

大船渡	折壁	千厩	陸前高田	矢作
×	×	×	×	×

【宮城県】

鹿折	唐桑	気仙沼	大谷	本吉	歌津	志津川	柳津
×	×	○	○	×	○	×	○

この結果を見る限り、若年層での使用は高年層に比べて一地点だけ多いが、大谷の話者は19歳から21歳まで、歌津の話者は18歳から22歳まで仙台に在住しており、その頃に仙台で習得した可能性もある。しかし、最も注目すべきは、岩手県での使用が皆無である点と岩手県に近い宮城県の地域での使用がない点だ。つまり、程度副詞的なイキナリは、仙台市の若年層の間では盛んに使用されているとしても県を超えて伝播していくほどの普及力は持っていないと言える。

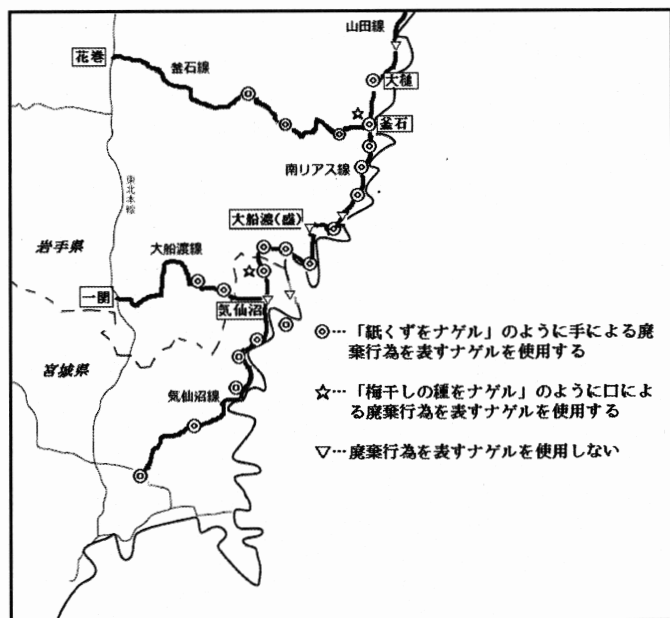
4 廃棄行為を表すナゲルの分布

では、東北全域で使用される廃棄行為を表すナゲルの場合はどうだろうか。東北方言の廃棄行為を表すナゲルは<動作主が不要な対象を自分の所有領域から外側に移動させる>ことを表すが、共通語のナゲルは<対象を遠くに飛ばすことで動作主の領域から動作主の存在しない領域へと移動させる>ことを表す。つまり、東北方言のナゲルと共通語のナゲルは意味的には異なる行為を表しているが、より抽象的にとらえれば、両者とも対象を動作主のいない別の領域へ移動させるという点で類似した現象を問題にしているのである。佐藤（2004）では、この類似点が原因となって東北方言のナゲルの意味と共通語のナゲルの意味を、ナゲルという形態が表す多義ととらえ「捨てる」という意味を表すナゲルを方言だと思わない、いわゆる「気づかない方言」だと意識する人が後を絶たないと考察した。

廃棄行為を表す方言語彙の全国分布をまとめた国立国語研究所『日本言語地図 第62図』による

と、ナゲル・ブンナゲルの回答は東北地方のほぼ全域を占めている。しかしながら、東北の中にはごく少数だが、廃棄行為を表す際にナゲルではなくステルを使用する地域があることも確かである。では、今回の調査地域である南三陸地域はどうだろうか。

【図5】南三陸地域における廃棄行為を表すナゲルの分布



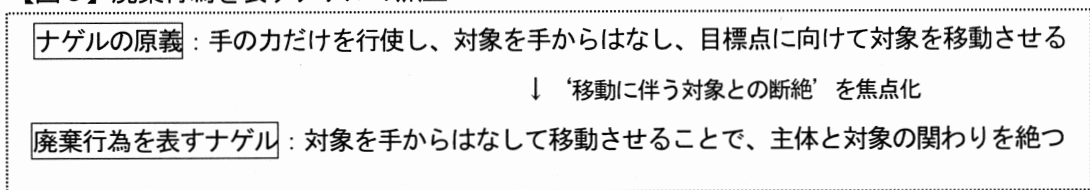
図を見る限り、ほとんどの地域で廃棄行為を表すナゲルが使用されている。ただし、それは「紙くずをナゲル」のように手による廃棄行為を表す場合に限られるようだ。今回の調査では、手を使わず口から直接に対象を廃棄する「梅干しの種をナゲル」の使用の有無も尋ねたが、使用の回答があったのは岩手県の釜石と宮城県の鹿折の2地点のみだった。

その一方で、岩手県の洞泉、船越、越喜来、大船渡、宮城県の唐桑、気仙沼では廃棄行為を表すナゲルを使用

しないという回答があった。『日本言語地図 第62図』でも東北地方で廃棄行為を表すナゲルの使用がない地域は山間部や沿岸部に集中する。だとすれば、なぜ山間部や沿岸部に廃棄行為を表すナゲルを使用しない地域があるのだろうか。

この問題を考えるためには、そもそも廃棄行為を表すナゲルがどのような過程を経て成立したのかという点について考察しなければならない。櫛引(2008)では【図6】のような考えを述べた。

【図6】廃棄行為を表すナゲルの派生



【図6】におけるナゲルの原義とは、歴史的には中央語のナゲルであり、現在は共通語の意味のナゲルである。ナゲルの原義が表す行為は主体が対象から手をはなすことで対象を移動させることだが、その移動の結果、対象を移動させた主体と対象の間には距離が生まれ直接的な関わりは断たれる。つまり、ナゲルの原義は‘移動に伴う対象との断絶’という特徴を潜在的に有しており、それが焦点化したことで、主体と対象の関わりを断絶を問題にする廃棄行為のナゲルが生じたのではないかと考えられる。

では、その廃棄行為を表すナゲルはいつ頃生じたのだろうか。その詳しい年代はわからないが、近世の南部藩藩士の服部武喬による『御国通辞』に、

(4) 江戸詞 御國辞

すてる 棄 なげる

(御國通辞 態藝門：寛政二年 1790)

という記述があることから、廃棄行為を表すナゲルは近世の東北ではすでに成立していたと考えられる。しかし、『日本言語地図 第62図』の分布状況を踏まえると、【図6】の変化は内陸部で起きたものであり、山間部や沿岸部など地理的条件の厳しい地域には廃棄行為を表すナゲルは伝播しなかったようだ。今回調査した南三陸地域における廃棄行為を表すナゲルの非使用地域もそうした事情を抱えた地域であり、東北地方において廃棄行為を表すナゲルが成立する以前の状況を残した地域であると考えられる。

ところで、今回の調査では手を使わず口で直接に対象を廃棄する場合の表現についても尋ねたが、その結果、<吐き出す>という意味のホキダスという回答が多くあった。ホキダスは東北から中部地方にかけて使用されることが知られているが、古くは(5)(6)のように江戸語の文献にも登場する。

(5) さし向かひまづほうづきをほき出させ

(川柳万句合：宝暦九年 1759)

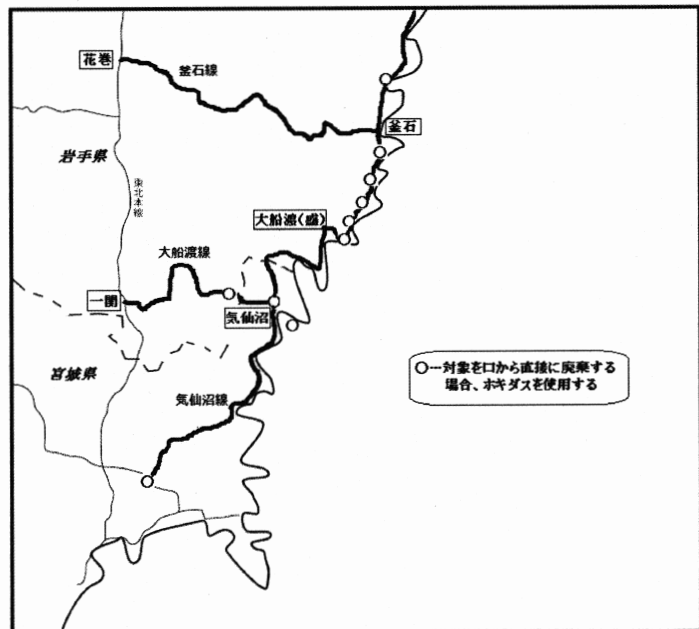
(6) 彌次郎はめをふさいでいちぜんくってしまふに、北八ほき出して

(続東海道中膝栗毛 九・下：文化七年 - 文政五年 1810 - 22)

ホキダスについては回答者による自由回答であったため、すべての調査地点で確認がとれたわけではないが、回答のあった地域を地図化してみると三陸沿岸にそって分布していることがわかる。

【図7】自由回答としてホキダスが回答された地域

ホキダスは『日本方言大辞典』(小学館)に掲載がなく、詳細な使用地域の実態がわからない。そういう意味で【図7】は、南三陸地域におけるホキダスの分布状況を示す貴重な資料だと言えるだろう。



5 下車を表すオチルの分布

東北方言にまつわる笑い話の一つに次のようなものがある。

(7) [駅でのアナウンス]「オチルヒトガ シンデカラ オノリクダサイ」

これは、電車の乗客に対して、下車する人が済んでから乗るように注意を促したものである。「シンデカラ」は「済(す)んでから」のことだ。東北では母音[u]の発音が中舌母音[i]になることから、「済(ス)んでから」のス([ʃu])がシ([ʃi])のように聞こえる。

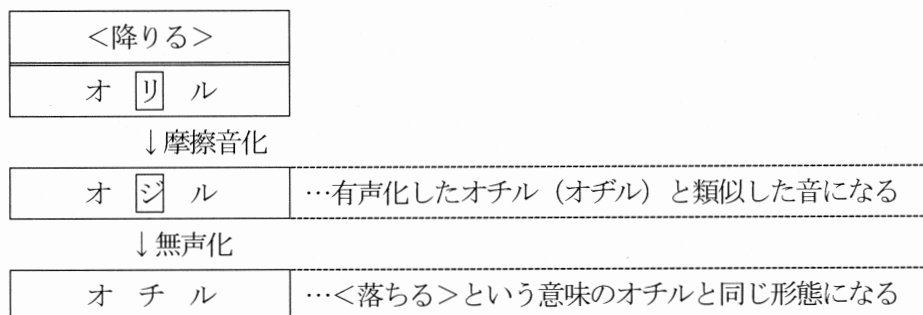
しかし、本稿で問題にしたいのは「オチルヒト」の方である。東北の一部の地域では、共通語ではオ Ril とすることをオチルと言う。

なぜオ Ril をオチルというのか。加藤正信(1996)は次のように述べている。

(8) オチルは、太平洋側のどこか、たとえば仙台あたりに発生して、交通路沿いに伝播した新しい方言と思われる。「オ Ril」の「リ」が摩擦化して「ジ」に近くなって、これが「落ちる」の有声化した「オジル」と似た音になり、一方、意味の上でも「降りる」と「落ちる」の類似が作用して、「降りる」がオチルになったのではあるまいか。(p46)

この仮説を少し補うかたちで図示すると、次のようになる。

【図8】 下車を表すオチルの派生



下車を表すオチルの全国分布を示した『日本言語地図 第94図』の解説でも、東日本において「リ」が摩擦化して「ジ」に聞こえる地域とオチルが下車の意味で使われる地域が重なることが指摘されているが、下車を表すオチルについては<落ちる>という意味のオチル自体の意味変化による派生も考えられる。だが、本稿では音声的な変化や意味的な変化の問題ではなく、(8)で加藤が指摘した「交通路沿いに伝播した」という点に注目して論を進めたい。

下車を表すオチル、つまりオチルを<降りる>という意味で使うことが文献で確認できるのは、南部藩士の服部武喬がまとめた『御国通辞』からである。

(9) 屋根からおりる をちる

下ルヲ落ルト云テハ分ラズ、馬カラヲリル・ヲチル 階子カラヲリル・ヲチルニテ考フベシ。

(御国通辞 態藝門:寛政二年1790)

この記述から、近世の南部藩では高い場所から低い場所への移動をオチルで表していたことがわかる。当時はもちろん汽車はないが、移動手段の対象から降りるという意味では「馬からオチル」の用例に近い。

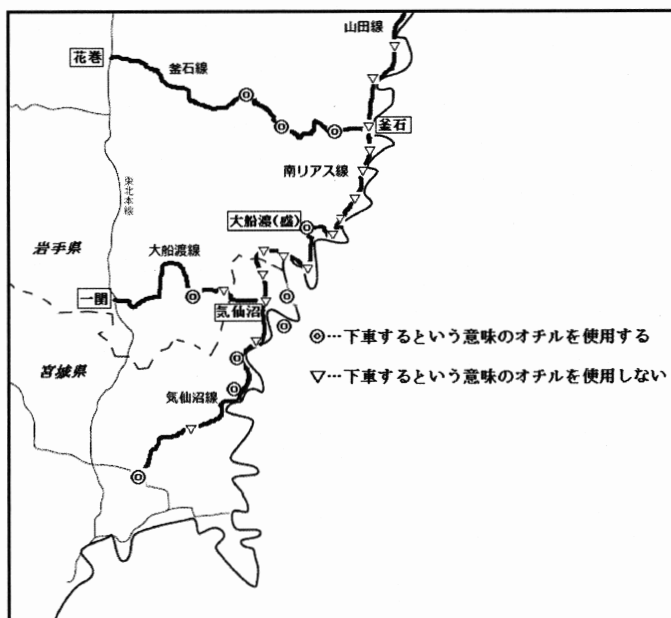
しかし、『日本言語地図 第94図』を見ると、山形と秋田の大半と青森県の日本海側、さらに岩手県と宮城県の内陸部ではオチルを下車の意味で使わないと回答されている。逆に、福島県、宮城県と岩手県の内陸部ではオチルを下車の意味で使う回答が集中している。

さらに詳しく見ると、オチルを下車の意味で使う地域は東北本線沿いか比較的歴史が古い在来線沿いである。そもそも東北本線は日本最初の私鉄として開業した日本鉄道の路線を受け継いでいる。日本鉄道は明治十五（1882）年に着工されてから紆余曲折を経て、明治二四（1891）年に東京の上野から福島、宮城、岩手を経由し青森までを繋げた。

こうした事情を踏まえると、次のような仮説が立てられる。東北の内陸部では、すでに近世の頃からオチルを<降りる>の意味で使っていた。これは先に見たとおり方言集『御国通辞』で確認できる。そして、明治以降、鉄道の開業が急ピッチで進みにつれ、内陸部で使われていた下車を意味するオチルは各地に伝播した。だが、鉄道開発が遅れた地域である東北の日本海側や三陸沿岸の地域までは伝播が進まなかった。それが結果として『日本言語地図 第94図』の東北における<下車する>という意味のオチルの分布状況を生み出したのではないか。

この仮説を検証するためには、東北全域における鉄道の歴史に踏み込む必要があるが、今回は三陸沿岸の状況を把握することにする。2007年の調査では「電車から下車する場合」「バスから下車する場合」「階段から降りる場合」についてオチルを使用するかどうか尋ねた。その結果、電車やバスから下車するという意味でオチルを使用する人のほとんどが、階段から降りるの意味でもオチルを使用することが確認できた。

【図9】南三陸地域における下車を表すオチルの分布



図を見て最初に気がつくのは、釜石と大船渡を結ぶ南リアス線に▽が集中して分布すること、つまり大船渡を除いた調査地点で下車を表すオチルが使用されていないという点である。

また、釜石から北にのびる山田線の大槌、船越でもオチルの使用はない。

一方、今回調査した釜石線の3地点、気仙沼線の3地点では使用が確認できる。また、大船渡線では千厩のみ使用が確認できた。ただし、山田線、釜石線、大船渡線については部分的にしか調査していないため、これらの路線に

における下車を表すオチルの分布については、あらためて調査が必要である。

次のページに、調査地点がある鉄道の歴史の概略をまとめた。

【図10】 今回の調査地点がある鉄道の歴史

	釜石線	山田線	南リアス線	大船渡線	気仙沼線
1913 (大正 2)	花巻—土沢 ※岩手軽便鉄道 西線開業				
1914 (大正 3)	遠野—仙人峠 ※貨物				
1925 (大正 14)				一関—摺沢	
1927 (昭和 2)				摺沢—千厩	
1928 (昭和 3)				千厩—折壁	
1929 (昭和 4)				折壁—気仙沼	
1932 (昭和 7)				気仙沼—上鹿折	
1933 (昭和 8)				上鹿折—陸前矢 作—細浦	
1934 (昭和 9)		盛岡—宮古		細浦—大船渡	
1935 (昭和 10)		宮古—陸中山田		大船渡—盛	
1936 (昭和 11)	花巻—仙人峠	陸中山田—船越			
1938 (昭和 13)		船越—大槌			
1939 (昭和 14)		大槌—釜石			
1950 (昭和 25)	花巻—釜石				
1956 (昭和 31)					気仙沼—気仙沼港
1957 (昭和 32)					南気仙沼—本吉
1968 (昭和 43)					前谷地—柳津 ※柳津線
1970 (昭和 45)			盛—綾里 ※盛線		
1973 (昭和 48)			綾里—吉浜		
1977 (昭和 52)					柳津—本吉
1981 (昭和 56)			三陸鉄道株式会 社創立		
1984 (昭和 59)			盛—釜石 吉浜—釜石 第三セクターと して開業		

ここに挙げた5路線のうち、南リアス線は開業してからの歴史が最も浅く、民営化のあおりを受け最終的には第三セクターとして開業した複雑な経緯を有している。

前のページの【図9】と【図10】を合わせると、釜石線のように歴史が比較的古い鉄道の沿線には下車の意味のオチルが分布していることに気づく。このことから、比較的古くから開業していた鉄道は、内陸部で使用されていた下車を表すオチルの使用地域を拡大させる原動力になったことが推測される。それに対して、歴史が浅い南リアス線は、下車を意味するオチルを伝播させるだけの力が十分ではなかったのではないか。さらに、南リアス線が全線開業に至った頃(1980年代)には、共通語化が進行して下車の意味で使うオチルそのものに使用地域を拡大させるだけの活力がなかったことも考えられる。

6 南三陸という地域の特性

本稿では、共通語と同一の形態を有しながらも方言特有の意味を持つ程度副詞的なイキナリ、廃棄行為を表すナゲル、下車を表すオチルの南三陸地域における地理的な分布を報告した。この結果から見えてくる南三陸の特性は次の三点である。

<南三陸地域における仙台の影響力の限界>

まず、南三陸地域における程度副詞的なイキナリが浮き彫りにしたのは、東北最大の都市である仙台が南三陸において強い社会的威光を持った地域とは言い難いということである。程度副詞的なイキナリは仙台を中心とした地域で盛んに使用されているが、南三陸地域の宮城県側に若干の使用が確認できるものの、岩手県側にはほとんど使用がない。このことは、東北最大の都市である仙台市が人口や経済面では東北一だとしても、社会的威光という面では他地域を凌駕するような力を持ち得ていないということを意味する。詳しい調査を行っていないためここからは推測の域を出ないが、おそらく南三陸地域および他の東北の地域では、仙台の影響よりもメディアを通じた東京の影響を強く受ける傾向があるのではないだろうか。

<南三陸地域の言語的な孤立性>

廃棄行為を表すナゲルの分布状況から明らかになったのは、南三陸地域の東北における孤立性である。廃棄行為を表すナゲルは東北のほぼ全域で使用されているが、山間部や沿岸部など地理的条件が厳しい地域では使用されていない。今回調査した南三陸地域の中にも使用が確認できなかった地域があった。これらの地域は、廃棄行為を表すナゲルが共通語の意味のナゲルから意味変化をして派生する以前の状態を維持していると考えられる。南三陸地域は地理的条件の厳しさ故に東北の他の地域から孤立したことによって、東北方言の中でも特異な言語状況を維持している地域と言えるだろう。

<南三陸地域における方言伝播の媒体としての鉄道の二面性>

下車を表すオチルの分布状況は、南三陸地域において鉄道が方言伝播に果たした役割の大きさを露わにした。離れた地域を結ぶ鉄道は人だけでなく言葉も運ぶことから、鉄道と言語伝播の問題は従来から注目されてきた。だが、南三陸地域の場合、方言伝播の媒体としての役割を果たしたのは開業の歴史が古く長い期間の中で地元で根付いてきた鉄道であり、南リアス線のように開業までに大幅な時間をかけた比較的新しい鉄道はそうした伝播の媒体としての力を持ち得なかった。その結果、南リアス線沿いでは共通語と同様、下車を表す際にはオリルが用いられている。南三陸地域は大正期から開業された古い鉄道と昭和の終わりに全線開業した鉄道が存在する地域であるため、方言伝播に関わる鉄道の影響と限界の両面を見ることができる。

7 おわりに

2011年3月11日に起きた地震による津波は、今回の調査地域に多大な被害をもたらした。関東大震災で被害を被った東京や神奈川の住民の多くが関西に移住したように、今回の東日本大震災でも多くの住民が県外へと避難している。それゆえ、本稿で報告した方言特有のイキナリ、ナゲル、オチルの地理的な分布状況は、震災後、大きく様相を変えたかもしれない。

しかしながら、本稿の6節で述べた<南三陸地域における仙台の影響力の限界>と<南三陸地域の言語的な孤立性>は、そこで生活する人がいる限り変わらないのではないだろうか。なぜなら、この二つの特性は内陸部との交流を容易に許さない厳しい地理的な条件によって生じたものだからである。内陸部との物理的な距離が解消しない限り、南三陸地域の地域らしさは失われないだろう。

だが、気がかりなのは南三陸地域における鉄道の今後である。今回調査した地点の駅の被害は次のように報じられている。

【図 11】 今回の調査地点で津波の被害を受けた駅

	津波で流出した駅	津波で半壊した駅
釜石線		釜石
山田線	大槌	
南リアス線		釜石、唐丹
大船渡線	大船渡、小友、陸前高田	唐桑
気仙沼線	歌津、志津川	

南三陸地域を走る鉄道は、その歴史の新旧によって地域の方言に異なる影響を及ぼした。長い歴史を持つ鉄道は内陸部で使う下車を意味するオチルを南三陸地域に運んだが、南リアス線のように新しく開業した鉄道は下車を意味するオチルを沿岸地域には伝えなかった。このことは、鉄道が方言伝播の媒体として果たす役割を考える時に、その鉄道の歴史も十分に考慮しなければならないことを示唆する。そういう意味で南三陸地域は大正期から敷かれた鉄道と昭和の終わりに敷かれた鉄道を有しており、鉄道と方言伝播の関係を考える上で理想的なフィールドだと言えるだろう。地元

の鉄道の復旧は、地元の復興の象徴でもある。南三陸地域の鉄道の復旧を切に願う。

<引用文献>

国立国語研究所（1967）『日本言語地図第二集』「第62図 すてる（捨てる）」「第94図 オチルを
“下車する”の意味で使うか」大蔵省印刷局

加藤正信（1996）「日本の方言と古語」加藤正信・佐藤武義・前田富祺共著『日本の方言と古語』南
雲堂

佐藤（櫛引）祐希子（2000）「「いきなり」の方言用法」小林隆編『宮城県仙台市方言の研究』東北
大学大学院文学研究科国語学研究室

佐藤（櫛引）祐希子（2003）「「気づかない方言」の意味論的考察—仙台市における程度副詞的な「イ
キナリ」—」『国語学』212 国語学会（現、日本語学会）

佐藤（櫛引）祐希子（2004）「東北方言の「ナゲル」の形成に関する一考察—宮城県石巻市方言の分
析を通して—」『文芸研究』158 日本文芸研究会

櫛引祐希子（2008）『日本語方言語彙の意味変化に関する研究』東北大学大学院文学研究科博士学
位論文

御國通辞：服部武喬・寛政二年1790（「近世方言辞書 第2輯」佐藤武義・木村晟・山田瑩徹・古
瀬順一・片山晴賢編輯 平成十二年2000 港の人）

※日本鉄道と南三陸地域における鉄道の歴史については、以下の資料を参考にした。

中村建治（2011）『日本初の私鉄「日本鉄道」の野望—東北線誕生物語—』交通新聞社

日本鉄道旅行地図帳編集部（2010・6・18）『新潮「旅」ムック 日本鉄道旅行歴史地図帳 東北』
新潮社

朝日新聞（2011・9・5）『AERA Mook 震災と鉄道 全記録』朝日新聞出版